

●春日部市民文化講座（第 11 回）

「千利休のもてなしの心 ～戦国武将はなぜ茶の湯に熱心だったのか 第 1 回 茶室「待庵」の利休のもてなし」

◆日時：2014 年 7 月 30 日(水) 11 時（ぽぽら春日部 4 階会議室）～12 時

■利休のもてなしの心は「わび茶」

今年度の大きなテーマは「利休のもてなしの心」としました。そして今日、第1回目は「茶室」について、茶室という装置は利休が発明したもてなしの大装置であるということをお話させていただきたいと思います。利休さんがわびの心でもてなすにあたって、その舞台装置として茶室を造ったわけです。この茶室というのは、どういう装置かという、そこに入ると「何か癒されるなあ」とか、「落ち着くなあ」、「静かな心になったなあ」、あるいは「平和だなあ」と思える空間なのです。そういう茶室の装置に、人は「静けさ」や「安らぎ」を求めているのです。その「安らぎの心」こそが「わびた心」なのです。何故、利休さんは、そうした茶室を造ったかという、当時は戦国時代で下克上、リーダーたちは戦うことを避けることができなかったのです。人が人を殺す、命の奪い合いを正当化して戦わざるを得ない。戦って帰ってくると、周りに居た人たちがいなくなっているのです。明日はわが身です。下克上という言葉が分かりやすく言ったら、裏切りということですから、みんな疑心暗鬼ですよ。人が人を信じられない世の中だったのです。それを当時は政治とも言ったのです。でも、これって今の時代ともちっとも変わっていないですよ。そういう時代の中で、戦わなければならない人たちが求めていたのが、「落ち着いた心」「静けさ」「平和」「安心」であったのです。自分の大好きな人を戦いで失っている。それも一人や二人ではない。この傷つき方というのは、今はトラウマなどと言いますが、心の傷は癒しようもなかったのでしょう。そうすると、人は逃避しようとするのです。戦国武将たちは常に戦っていたのです。ただ、戦争して向かい合っている時でも、刀を交えない時もあったのです。その時に武将たちが何をしていたかという、戦場に茶室を造って、お互いにもてなし合いをしているのです。これは敵も味方でもありますよ、これが面白いでしょう。そういう装置なのです。

■利休が発明した「炉」を切った茶室

そして、人が人を殺すという命の奪い合いを日常茶飯事のようにやっている戦国時代で、千利休という人は究極の「静けさ」というか、究極の「穏やかさ」というのでしょうか、「もてなし」というのか、もてなしの装置として今までにない茶室を造りました。それはどういう仕掛けがあったかと言うと、利休さんは茶室の中に「囲炉裏」を持ってきたのです。いわゆる「炉」を切ったのです。利休さんの革命的な発明は、もてなしの場に「炉」を切ったということです。そして全部、お茶を差し上げ、食事をする、そこを無駄なくお客様をおもてなしするのです。ぼくがいつも強調していることなのですが、面白いのは、「炉」を造ったということは、炭をくべて火を焚き湯を沸かしてお茶を点てる訳ですけども、そのおもてなしの始めに、炭を盛った籠をお客様の前に持ち出し、静かに炉に炭を継ぐ作業をするのです。こんなことはお客様が来るまえにやっておけばよいことなのですが、利休さんはわざわざお客様の前で、「改めさせていただきます」と言って、籠をも持ち出し、釜を上げて、無言のうちに炭を継いでいくのです。そして炭の最後には、ルックスライク「骨」ですよ。枝炭という石灰をまぶした化粧炭を置くのです。



この化粧炭が燃えて消えると、本当に骨のようになって残るのです。【写真：燃え残った炭、左側の白いのが枝炭】

これは利休さんが仕掛けた葬儀だとぼくは思っているのです。戦国時代に、まずは自分の命を与える。私が裏切るということは死んでもいいんだ。そういう思いで粗飯と一服のお茶を差し上げるという、自らの死をそこに見せたのです。みんなが忌み嫌う死を、おもてなしをするハレの場に利休さんという人は持ってきたのです。凄いことです。

■生きることと死ぬことの狭間で

みんな気がついていないことなのですが、利休さんという人は、生きることと死ぬことの狭間という、生死の間で右往左往する人間の心情という。利休さんは自分自身も感じていたのですが、戦国時代の武将達が感じていた生死の狭間に「わびの心」でおもてなしをするという茶の湯の世界を創りあげたのです。その装置が茶室なのです。

■利休の“わび”

今日の資料の中で、最初に出て来るのが西行の和歌(うた)ですね。最晩年の歌で、「願わくば 花の下にて 春死なん そのきさらぎの望月の頃」。この如月というのは旧暦の 2 月ですよ。満月で桜が咲いている頃に死ぬものなら死にたいと西行は詠ったと言われています。そして、このレジュメではさらに芭蕉の俳句を挙げました。「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る(めぐる)」。これは芭蕉さんの最晩年の句ですよ。もう一つ、「行く春や鳥啼き魚の目は泪」。これは、「奥の細道」に出発する時の句ですね。これはまさに峻別の句ですよ。峻別というのは、先ほど申しあげたように、A か B、生か死という狭間の心情です。芭蕉さんが、今、旅立とうとしている時に、鳥が美しく啼い

て私との別れを惜しんでくれる、さらに魚まで泣いていると詠んでいるのです。何を芭蕉さんは考えているのでしょうかねえ、でも、こういう感性をぼくらは忘れているではないですか。そういう中で、利休さんの“わび”の先生の武野紹鷗という人が好きだったというのは、「見わたせば 花も紅葉(もみじ)も なかりけり 浦の苫屋(とまや)の 秋の夕暮」(藤原定家)。「いったい生きるって何?」「死ぬって何?」「それが“わび”だよ」と武野紹鷗、これ利休さんの先生が好んでいるのです。そして、利休さんが今度は、「花をのみ 待つらん人に 山里の 雪間の草の 春を見せばや」(藤原家隆)。利休さんの言う秘めたる“わびの心”“もてなしの心”というのは、埋もれているけれども、そこには冬がまだあるけれども、心眼を開いてよ〜く見るならば、その雪の下にも青々とした草が芽生えているのです。私は、そういう春を見せたいなあ、これが利休さんの“わび”だと言うのですけれども、分かるかなあ…?

■二畳の茶室・国宝『待庵』

千利休さんが“わび茶”の装置としての「茶室」が成熟した時に、たった二畳の茶室を造るのです。この二畳は京畳ですから、関東間よりもちょっと広いのですが、畳二枚の茶室なのです。二畳の茶室というのはどんなに狭いかお分かりでしょう? そして二畳の隅に炉が切られているのです。その対角線上の所に躡り口(にじりぐち)というのを仕掛けたのです。躡り口というのは、人が躡って入る場所でこんなものですよ。人が膝行(いざ)って入らなければ入れないような仕掛けです。それが国宝の『待庵(たいあん)』で、『妙喜庵』という寺にあります。【『待庵』平面図】

■妙喜庵待庵平面図



■国宝の茶室『密庵』『如庵』

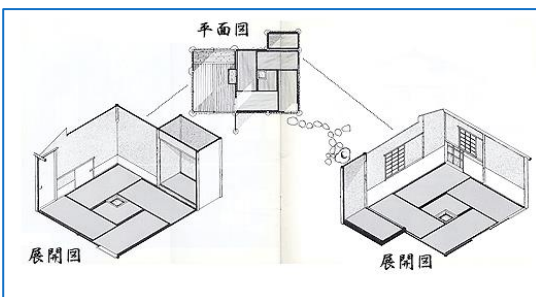
これは『密庵(みつあん)』【写真】という国宝の茶室です。ぼく、大徳寺の塔頭・龍光院で「密庵に入らせてほしい」と言ったら、「修行僧になれば入ることができる」と言われたんですよ。「どれくらいの期間」って聞いたら、「まあ、一か月くらい掃除をしたら見られるよ」と言われたので、今はその気でいます。掃除坊主で寺に行って『密庵』を見せてもらおうかな…と思っています。こちらは小堀遠州です。小堀遠州というのは、千利休さんから

続く一つの時代が終わって、徳川になった時代の花形です。ですから、利休さんの“わび茶”の系統を追っているのですけれども、利休さんの弟子である古田織部の弟子です。そして時代が変わりました。“綺麗さび”という利休さんの頃の“汚い茶碗”“汚い茶室”とは違った、ちょっと小綺麗な、ちょっとインテリっぽい香りのする茶室を造り、そして京の雅が少しそこに現れているような好みの道具でもてないことを善しとした人が小堀遠州なのですよ。もう一つ国宝と言われている茶室が『如庵(じょあん)』です。凄いですよ、木造で 400 年以上経った茶室が未だに存在しているのですから。これが織田有楽斎の『如庵』【写真】という茶室です。



■利休のもてなしの装置「茶室」は

「茶室」が利休さんによって造られて、“わび茶”の基本は四畳半なのですね。だから裏千家の『又隠(ゆういん)』



【展開図】という有名な茶室は、四畳半なのですよ。そして、利休さんが“わび茶”を習った最初の茶室も四畳半なのですよ。四畳半の茶室は武野紹鷗が確立したのですけれども、それから利休さんは三畳、二畳、一畳半までいっちゃったのです。皆さん、考えてみてください一畳半の広さを。畳一畳でおもてなしをしたら、最高 3 人でしょう。そして半畳におもてなしをする亭主が座ります。だから、茶の湯には無駄があってはいけないの



ですよ。動作も流れるようにいかないとダメなのです。その一畳半の茶室【平面図】の秘密をぼくは暴いちゃったのですよ。一畳というのは棺桶でぼく達が横になったときには一畳で充分なのです。そして後の半畳は看取る者の席です。だから、利休さんは死ぬときに、この一畳に横たわり、この半畳に誰かがいてくれたらそれでいいという装置「茶室」を残したのです。それが利休さんの遺偈(ゆいげ)、死ぬときの言葉に見事に顕れていて、エイヤーと言って自分の命をもてなしとして捧げるのです。

千利休がもてなしの装置「茶室」が自らを看取る場であったという話(高橋先生の仮説)は衝撃的なものでした。